

養護教諭の姿勢と児童の養護教諭認知（続）

School Nurse Teacher's Postures and Children's Cognitions of School Nurse-Teacher (continued)

太田 誠耕*・須藤(長峰)紀子**・早川三野雄

Seikou OHTA*, Noriko SUTOU(NAGAMINE)**and Minoo HAYAKAWA

論文要旨：前報小学生群に続いて、中1・2の中学生群（小6を含む。以下同じ）を被験者とする調査を先と同様の手続きで実施した。その結果、①中学生群において、立位中性型旧姿勢は養護教諭について規範的あるいは順応的な、葛藤する面の認知を、前傾親和型新姿勢は向社会的、知的、開放的な、健康に機能する面の認知を促すこと。②学年が高くなる程、生徒はAを頂点として他の4つの自我状態カテゴリーを平準化した、いわゆるA優位適応タイプに類似の養護教諭認知を持つようになること。③保健室に来る生徒側から見れば、前傾親和型は生徒の自我状態に任せる、保証する形で生徒との関係を生徒主導的に持てる姿勢メッセージを伝えていること、などが知られた。

キーワード：「養護場面エゴグラム」、姿勢、養護教諭、相談活動、中学生

I 目的

先の小学生群の報告に続いて¹⁾、中学生群を対象に養護教諭の姿勢が生徒の養護教諭認知に及ぼす影響について検討する。また、送り手である中学生の自我状態が受け手である養護教諭の姿勢とどのように相互作用しているかを検討する。

II 方法

被験者は青森県津軽地方3中学校の1,2年生男女278名である（表1）。小学生の結果と継続さ

せるため結果の処理には先に用いた6年生全員（180名）の資料も加えた。

刺激図版、手続き、結果の整理は「養護場面エゴグラム」の立位中性型旧姿勢および前傾親和型新姿勢の両図版各10枚を用いる等、前報と同じである。調査期間は平成15年9～10月である。

III 結果と考察

1. 旧・新姿勢の全体的な比較（表2）

小学校4～6年生を被験者とした前報で、小学

生群は前傾親和型の姿勢から保護的、支援的な対応や開放的な接触を予想する養護教諭像を認知する傾向をもっていた。ただし、立位中性型の姿勢が否定的な意味を伝いやすいことを示唆するとは断定されなかった

今回、中学生群においてはCPおよびNP反応において旧姿勢と新姿勢の間で有意な差が認められた（ $p<0.01$ ）。立位中性型姿勢はCP反応が返ってくると予想させ、前

表1 中学生群被験者の学年・性別人数（小6～中2）

学 年	性別	旧版	新版	合計	[原資料（調整数）]	
小6年	男子	50	50	100	59	(-9)
	女子	40	40	80	51	(-11)
	小計	90	90	180	110	(-20)
中1年	男子	32	32	64	33	(-1)
	女子	30	30	60	32	(-2)
	小計	62	62	124	65	(-3)
中2年	男子	45	45	90	50	(-5)
	女子	32	32	64	34	(-2)
	小計	77	77	154	84	(-7)
合 計	男子	127	127	254	142	(-15)
	女子	102	102	204	117	(-15)
	小計	229	229	458	259	(-30)

* 教育学部教育保健講座

Department of School Health Science, Faculty of Education, Hirosaki University

**青森県平館村立平館中学校

Tairadate Junior High School, Tairadate Village, Aomori Prefecture

表2 認知された自我状態の旧・新姿勢別の平均値とその検定(両側)

認知された 養護教諭の 自我状態	刺激図版 (姿勢)	人数 (小6～中2)	平均値 (SD)	t値/p
CP	旧版	2 2 9	3.99 (2.51)	4.252
	新版	2 2 9	3.13 (2.34)	p<0.01
NP	旧版	2 2 9	3.31 (2.31)	2.762
	新版	2 2 9	3.84 (2.19)	p<0.01
A	旧版	2 2 9	8.85 (3.58)	1.021
	新版	2 2 9	9.11 (3.44)	n.s.
FC	旧版	2 2 9	1.78 (1.98)	1.094
	新版	2 2 9	1.93 (2.13)	n.s.
AC	旧版	2 2 9	1.95 (1.77)	0.502
	新版	2 2 9	1.87 (1.88)	n.s.

傾親和型姿勢はNP反応を予想させ、姿勢によって異なった養護教諭認知を持つことが知られた。小学生群も同じ結果であったが、彼らには立位中性型姿勢にFC反応も多い傾向であった。

CPとNPは共に人が抱えている親(P)の自我状態であり、それから発せられる反応には、大人のイメージが立位や前傾の持つ姿勢メッセージの中から中学生によって明確に読み取られて反映している。また、概観的に見れば、CPとAC反応は旧姿勢から多く発せられ、NP、A、FC反応は新姿勢から多く発せられるようである。つまり、旧姿勢からは規範的な、またそれとは逆の従順な、自我の葛藤する面が読まれ、新姿勢からは向社会性、知的、開放的な、自我の健康に機能する面が読み取られていると言えよう。

2. 旧・新姿勢の学年間および学年別比較(表3)

小学校4～6年生の3学年間比較で、小学生群は学年が進むにつれてNP認知の傾向が低下し、CPやAの自我状態による対応を予想する傾向が強まった。また、4～6年生の各学年別比較は、各学年とも共通して新姿勢でCPが低く、両姿勢共にNP、A、ACは変わらなかった。個別には、4年生は前傾親和型よりも立位中性型に注目しやすかった。5年生は新姿勢の影響を受け、FCの自由な自己表出を予想した。6年生は前傾親和型に必ずしも影響されなかった。

今回の中学生群では、学年間の分散分析の結果、CP反応は旧・新両姿勢とも学年差を示さなかったが、中2のCP得点は両方で最も高い。NPとAC反応は新姿勢でのみ有意な差を示し(p<0.05)、AとFC反応は旧・新両姿勢共に有意な差を示した(いずれもp<0.01)。多重比較の結果はいずれも有意に、

NPとAで中1・小6より中2が低く、一方FCとACでは逆に中1・小6より中2が高いという順であった。

各学年毎に旧・新姿勢間の自我状態反応を比較すると、中1と小6は同じ結果を示し、CP反応は旧姿勢で高く(p<0.05)、NP反応は新姿勢で多い(中1;p<0.01、小6;p<0.10)。旧姿勢でのCP反応は中2でも中1・小6同様に多かった。

このように規範的な認知像が一方では強いものの、学年が高い程、養護教諭の保護的で知的に活動する、

共通に知られた面が生徒からは必ずしも強調されなくなり、むしろ自由で開放的、協調し順応する、どの人の内にもある子どもの自我状態に気づかれるようになる。ここには、意志的で人を労わり知的に行動できるなどの個人を強調した見方から、多くの人と協力し共感する関係を持つ社会人にまで拡大した見方へ変わっていく、その様相が反映されているのではないだろうか。青年期前期の小6・中1頃までに受け入れられていた大人像の中にある、P、A、Cが姿勢によって促進的にリリース(解発)され、養護教諭への認知も転換期を迎えるのであろう。

学年別の特徴の一つとして、中2では新姿勢のCP反応が旧姿勢に比べると更に低くなっている点に注目したい(p<0.01)。加えて新姿勢におけるA(7.60)以外の自我状態の反応得点がほぼ平準化(2.32～3.47)している点も注目される。ちなみに、最低～最高の得点範囲は中1で1.37～4.16、小6で1.28～4.10である。

中2におけるこのような得点の平準化は、養護教諭の対応が多様化して予想でき、従って自我状態から分析できる養護教諭のパーソナリティも多面的に認知されるようになっていたことを示唆している。それはエゴグラム・パターンに言われるA優位適応型類似の自我構造をしていると考えられる²⁾。この意味で、中2頃の生徒はバランスのとれた養護教諭像を認知しはじめるのであろう。

姿勢が学年差を捉え、それから養護教諭に対する新たな認知像が知られるとすれば、小6・中1頃を境に養護教諭の対応にも変換が求められるであろう。また、中2がもし養護教諭のパーソナリティをバランス良く捉えることができてくれば、生徒側の発達という要因と養護教諭側の

表3 旧・新姿勢の学年間および学年別平均値とその検定(両側)並びに分散分析・多重比較(小6～中2)

認知された 養護教諭の 自我状態	学 年		中1年		中2年		3学年間の分散分析と多重比較	
	刺激 図版	平均値 (SD)	t値/p	平均値 (SD)	t値/p	F値/p	多重比較・	多重比較・
CP	旧版	3.78 (2.57)	2.292	3.71 (2.36)	2.437	4.47 (2.52)	2.659	n.s.
	新版	3.03 (2.16)	p<0.05	2.84 (1.94)	p<0.05	3.47 (2.27)	p<0.01	n.s.
NP	旧版	3.56 (2.15)	1.772	3.11 (2.33)	2.666	3.18 (2.46)	0.300	n.s.
	新版	4.10 (2.23)	p<0.10	4.16 (2.03)	p<0.01	3.27 (2.19)	n.s.	p<0.05
A	旧版	9.77 (3.41)	0.338	9.56 (2.79)	0.544	7.21 (3.79)	0.939	p<0.01
	新版	9.91 (3.10)	n.s.	9.87 (2.81)	n.s.	7.60 (3.78)	n.s.	p<0.01
FC	旧版	1.16 (1.43)	0.645	1.50 (1.64)	0.527	2.73 (2.40)	1.474	p<0.01
	新版	1.28 (1.26)	n.s.	1.37 (1.73)	n.s.	3.13 (2.67)	n.s.	p<0.01
AC	旧版	1.72 (1.69)	0.279	1.89 (1.63)	0.896	2.26 (1.93)	0.231	n.s.
	新版	1.66 (1.98)	n.s.	1.61 (1.44)	n.s.	2.32 (2.60)	n.s.	p<0.05

表4 中学生群(小6～中2)の自我状態別・姿勢別平均値とその検定(両側)

中学生群 の自我状 態5類型 (図版番号)	認知された養護教諭の自我状態		NP		A		FC		AC	
	刺激 図版	平均値 (SD)	t値/p	平均値 (SD)	t値/p	平均値 (SD)	t値/p	平均値 (SD)	t値/p	平均値 (SD)
CP (4・7)	旧版	1.28 (1.22)	5.328	.65 (.95)	1.931	.35 (.74)	1.394	.96 (1.13)	1.802	.76 (1.02)
	新版	.75 (.98)	p<0.01	.51 (.89)	p<0.10	.46 (.87)	n.s.	.77 (1.05)	p<0.10	.63 (.88)
NP (8・9)	旧版	.81 (.99)	3.632	.81 (.98)	1.135	.15 (.49)	0.641	1.10 (1.26)	0.366	.43 (.82)
	新版	1.13 (1.08)	p<0.01	.91 (.97)	n.s.	.18 (.54)	n.s.	1.14 (1.22)	n.s.	.47 (.80)
A (1・5)	旧版	1.25 (1.20)	1.041	1.51 (1.25)	1.022	2.64 (1.36)	0.302	1.28 (1.33)	0.395	2.17 (1.31)
	新版	1.36 (1.27)	n.s.	1.62 (1.26)	n.s.	2.60 (1.37)	n.s.	1.24 (1.29)	n.s.	2.30 (1.19)
FC (6・10)	旧版	.27 (.63)	1.162	.41 (.79)	0.066	.21 (.60)	0.883	.50 (.89)	1.946	.40 (.80)
	新版	.34 (.75)	n.s.	.40 (.73)	n.s.	.16 (.54)	n.s.	.66 (.94)	p<0.10	.36 (.81)
AC (2・3)	旧版	.39 (.75)	0.312	.60 (.87)	0.763	.65 (1.01)	0.579	.15 (.50)	0.187	.18 (.59)
	新版	.51 (.73)	n.s.	.54 (.88)	n.s.	.59 (.94)	n.s.	.16 (.52)	n.s.	.19 (.56)

姿勢という要因とが対応のあり方に変化を生み出し、児童・生徒理解も拡大されていくのであろう。しかし、このことについては前報で触れた小6に対する新図版の適否も含め、今後中3以上の資料を加えて検討しなければならない。

3. 生徒の自我状態別にみた旧・新姿勢の比較 (表4)

前報で児童の自我状態と相互作用して新姿勢では旧姿勢に比べ次のようにメッセージの読み取り、意味づけがなされていることを示した。児童がCPの自我状態で発話している時、養護教諭の前傾親和型の姿勢は状況や関係を修復する調整役を期待させる。NPの時にその姿勢は児童の抱く自我状態と養護教諭の伝えるメッセージとを矛盾・競合させてしまう可能性を持っていた。Aの時にその姿勢は子どもたちをもっと知的な者として認めるような、養護教諭からの理解を期待している面があった。児童がFCの時には、養護教諭の新姿勢は柔軟多様なコミュニケーションができるという期待を持たせた。ACの時には、旧姿勢では規範的な自我状態も認知されていたが、姿勢の違いは児童の認知に決定的には影響しなかった。要するに、児童の自我状態によって姿勢の伝達するメッセージは変化すること、従って前傾親和型の姿勢であることだけが児童の健康要求を常に充足させるのではなかった。

次に、中学生群の結果について述べたい。生徒の自我状態がCPの時、養護教諭の自我状態は旧姿勢よりも新姿勢ではCP, NP, FCが有意にまたは有意な傾向をもって低いと見られている(CP; $p < 0.01$, NP, FC; $p < 0.10$)。AとACは両姿勢で差がなかった。生徒が規範的な自我状態にいる時、前傾親和型新姿勢には生徒の側の判断基準や考え方に任せるが、一面に自らの判断で現実的に物事を即決できない面があることも捉えている。CPの生徒にとっては立位中性型旧姿勢の方が先生からの対応がわかりやすいと言っても良いだろう。しかし生徒がCPだからこそ、先生は親(P)の自我状態を前面に出したり、生徒の真剣さを省みないで関わってくることはなく、任せてくれると、生徒には思えるのかもしれない。

生徒がNPの自我状態の時、養護教諭は前傾親和型をとりつつも規範的なCPで対応する、と有意な差を以って見られている($p < 0.01$)。これは小学生群と逆である。CP以外の自我状態では両姿勢間の

反応に有意な差はなかった。NP場面でのみ新姿勢にCP反応が高いことは、生徒がNPの自我状態であれば、養護教諭はそのような生徒の思いやりのある、支持的な親の自我状態を肯定し、保証するという形をとって規範的に生徒と対応してくれる、と見られているのであろう。同じ保証を与えるのであっても、小学生はそれを旧姿勢から、中学生はそれを新姿勢から読み取りやすい。中学生には機嫌良くて好意的で、生徒を信頼して任せる態度、もしくは思い込みと生真面目さが認知されやすい。前傾親和型新姿勢はこのような中学生の養護教諭認知を促す働きをしているものと思われる。

生徒の自我状態がAの時、姿勢の違いを問わず多くの場合に生徒は、養護教諭をAやACで対応してくれるて、良く仕事のできる、協力的な人と見ており、生徒と養護教諭双方の知的、順応的な自我状態が相補的に機能していると考えられる。これは小学生群と同じである。

生徒の自我状態がFCの時、養護教諭のFC反応を予想する回答が旧姿勢より新姿勢に有意な傾向で高い($p < 0.10$)。生徒も、率直にそしてストレートに感情や自己表出をしても、明るい世話好きな新姿勢の養護教諭が保健室を安心のできる場として確保していることを知っているのであろう。これも小学生群と同じであった。

生徒がACの自我状態である時、NPやAによる対応を生徒の多くは予想してはいるが、姿勢の違いは生徒の養護教諭認知に影響していなかった。小学生群で新姿勢からAを予想した反応が他の自我状態の反応よりも多く、彼らがその姿勢から明解、安定的に対応されることを期待したのと同じように、中学生群も養護教諭にはいつもNPやA(小学生群では加えてCP)で対応される、つまりいつでも生徒の健康要求に応え、合致した対応をしてくれると見ているのであろう。

以上のような、生徒の自我状態に対応する養護教諭についての認知像を要約すれば、中学生が図中の人物に同一視してCPやNPの時には、前傾新和型は、生徒の親の自我状態に任せてしまい、自分からは積極的に関わらず受身になる、あるいは保証するという形で安定的な関係を確保する。FCの時、保健室は安心できる場として保証されている。AとACの時には、生徒の現実の要求を満たす仕事ができる、という認知像が働いている。新姿勢が常に単一の意味を伝えるのではないが、生徒主導の関わり方の時(CP, NP, FC)には、新姿勢は

中学生との安定的な関係として現れやすい。生徒がAで現実的な行動ができ、あるいはACで消極的になると、立位中性型でも前傾親和型でも仕事中心に現実の健康要求を満たす養護教諭が認知されやすい。

IV まとめ

前報小学生群の考察でも述べたことであるが、児童・生徒の自我状態によって養護教諭の姿勢の影響は異なって認知された。しかし、旧姿勢よりも新姿勢において養護教諭は多様に知られ、生徒から新しい理解や関係が得られる可能性は高いだろう。多様なライフスタイル、生き甲斐・目標、経験や能力などが養護教諭の中に研鑽・蓄積され、児童・生徒の自我状態がそれを求めれば、それは現実のものになることを児童・生徒に伝えなければならない。

児童・生徒から認知される養護教諭の自我状態パターンが中2においてA優位適応型へと、Aをピークとし他の4カテゴリーが平準化された認知像に変わってきた。小学生にとっての期待される認知像と中学生・高校生にとって、おそらく教職員との関係で期待される認知像がパーソナリティと

して把握できていくとすれば、今後もしいくつかの研究報告が積み重ねられていくことで、それは「養護場面エゴグラム」に描いた旧姿勢・新姿勢の一つの成果となるだろう。

V 文献

- 1) 長峰紀子, 太田誠耕, 早川三野雄 養護教諭の姿勢と児童の養護教諭認知 弘前大学教育学部紀要 第91号, 119~129, 2004
- 2) 末松弘行, 和田迪子, 野村忍, 俵里英子 エゴグラム・パターン 1989, 金子書房

謝 辞

本研究にご協力下さった中学校3校の先生方、生徒のみなさんに心から御礼申し上げます。

付 記

なお、調査研究名「養護場面エゴグラム」に用いている“エゴグラム”の語については慎重でなければならないが、当面はこの名称で誤解を生じないように留意しながら継続したいと考えている。

(2004. 7. 28受理)